

地域のひろば



～未来の担い手確保への取り組み～

楽しく福祉にふれる場を

地域では、少子高齢化がすすみ、見守りなどの支援を必要とする人が増加する一方で、担い手不足の深刻化が予想されています。こうしたことから、「子どもたちに、楽しみながら福祉のことを知ってもらおう」と、各市町村社協で未来の担い手確保の実践が広がっています。工夫を凝らし、取り組みを進めている2社協をご紹介します。



● 交野市社会福祉協議会

発見ーじもとの福祉

交野市社会福祉協議会（以下、市社協）では、市内在住の小中学生を対象に「きみのしらないかたのザ★クイズラリー」を行いました。中学校区ごとに作成された地図を頼りに市内の福祉施設を回ってクイズに答え、クリアすると賞状と景品がプレゼントされます。クイズは施設職員が作成し、施設に関する問題が出題されます。職員とのふれあいだけでなく、クイズを通して施設を知ることができるので、コロナ禍に対応した非接触型イベントといえます。

夏休みの思い出を

きっかけは、CSW（コミュニケーションソーシャルチャルワーカー）と関係機関が集まる会議での「外出機会が減っている子どもたちの夏休みの思い出になるイベントを！」という発案でした。賛同した社協と複数の福祉施設が連携し、約1年の準備期間を経て、今年の7月から約4か月間実施しました。



市社協の米谷友見さん(左)と吉田亜希子さん(右)

施設の協力を得て

今回の取り組みは、市内複数の福祉施設から構成される交野市社会福祉施設地域貢献連絡会（以下、連絡会）の協力を得て実施されました。参加した施設も改めて、地域内での支え合いの重

● 寝屋川市社会福祉協議会

親子の任務はボランティアを知ること！

「MISSIONX FAMILY」と題して寝屋川市社会福祉協議会（以下、市社協）は地域の担い手不足解消のため、親子でボランティアについて知ってもらう体験事業を実施しました。市内の小中学生とその保護者を対象に、手話や車いす、アイマスクなどを体験するミッションをクリアしながら、自分にどんなボランティアができるかを学びます。8月7日（日）、11日（木祝）の2日間開催され、延べ12組25人が参

加しました。

「北部地震のとき、子どもが幼稚園で習った防災の知識を実践してくれたので、今日の体験も人助けをするきっかけになればと思います」と話す保護者も。親子ともにボランティアへの関心の高さがうかがえます。子どもからは「いろいろな体験は楽しかったけど、（助けが必要な人は）こんなに不安で、ドキドキしていたんだと知れた」と、要配慮者の気もちを考慮する声もありました。市社協の寺本麻理菜さんは「子どもたちの心に福祉の種を蒔くことはもちろん、保護者に福祉委員やボランティア

要性について考える良い機会となりました。

イベントに協力した（福）豊年福祉会の西中宏さんと中村和巳さんは、「特別養護老人ホームなどの介護施設は子どもたちになじみがないため、知ってもらう良いきっかけになりました。クイズ作成では、言葉選びに苦戦しましたが、携わることができて良かったです」と話します。

他には、「『どんなことをしているの？』と関心を抱く子どももいて、うれしかったです。自ら答えを探し、考える過程を通して、座学では得られない経験をしてもらえたかと思えます」と（福）心生会の竹之中裕子さんは語ります。地域のイベントが次々と中止になる中、子どもたちにとって貴重な学びにもなりました。

福祉を将来の選択肢に

連絡会で幹事を務める（福）かたの福祉会の田伏高治さんは、「子どもたちが汗を流しながら地図を握りしめて取り組む姿には心を打たれました。若い世代が福祉にふれる機会を作ること

も、我々の使命だと思っています」と熱く語りま



交野市社協の情報はコチラから！

地域での活動のようすがご覧いただけます。



Twitter Instagram Facebook

寝屋川市社協の情報はコチラから！

日々のお仕事のようすがご覧いただけます。



Instagram



一番もりあがったのは水鉄砲ミッション！（左から市社協の寺本麻理菜さん、杉谷嘉紀さん、藤沢康子さん）

の大切さを知ってもらい、地域の活動に関心をもってもらうことも重要なねらいです」と語ります。

協力者の活躍に手ごたえ

このような子ども向けのイベントを開催するのは初の試みで、運営に参加した福祉委員やボランティアもモチベーション高く準備を進めました。

手話体験コーナーを担当した石津校区福祉委員会ボランティア部会 手話の会の奥村幸子さんは「コロナ禍では練習で集まることもすらも自粛していました。今日が久しぶりの活動と交流の場でもとても緊張しました」と無事に役割を終えて安堵の表情を見せました。車いすとアイマスクの体験コーナーを担

「MISSIONX FAMILY」は親子が体験するだけでなく、福祉委員やボランティアにとっては活躍の場に、参加者と福祉委員・ボランティアにとっては交流の場にもなりました。

「参加者、協力者の満足そうなお手ごたえを感じたので、今後このようなイベントを企画していきたい」と市社協の藤沢康子さんは展望を語りました。

まずはふれてみる

体を動かしながら、楽しく学べる今回の取り組みは、強く親子の印象に残ったでしょう。まずは住民に福祉にふれる機会を。市社協の次なる担い手確保の仕掛けに注目です。



さまざまなミッションをクリアしていく参加者